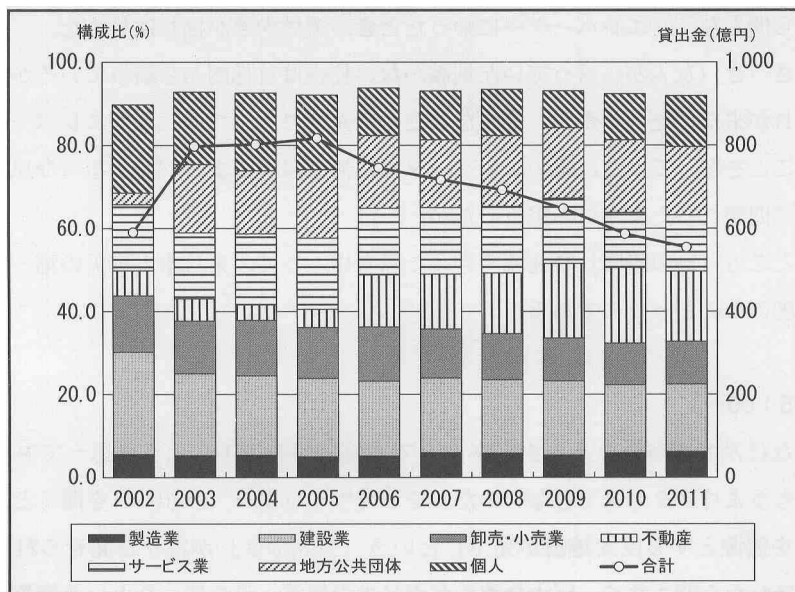


<第3図> 釧路信用組合の業種別貸出金の推移（各年3月末）



(出所) 第1図に同じ。

3月

東日本大震災

横島 公司

3. 11 [14:46] — 「あの瞬間」、あなたは何をしていましたか？

今日もまたいつもの日常が訪れる。多くの人間がそうであるように、自分もまた、いつもの日常が当たり前のように繰り返されるのだと、そう信じていた。

「いつか来るとは思っていたが、まさか今日来るとは思わなかった」。その「まさか」が、現実になったのだ。

3月11日。筆者は所用のため札幌に滞在していた。11日の午前中に羽田空港を離陸、正午過ぎに札幌に到着。あと数時間遅れていたら、北海道という「安全地帯」に辿り着くことはおろか、下手をしたら羽田空港に「雪隠詰め」にされていた可能性すらあった（そのため、後に首都圏の友人達からは「運が良い」と言われることになる）。

「あの瞬間」は、首都圏の友人と打ち合わせの電話中だった。「なんだか揺れてる」という電話の声。深く考えることもなく、友人には「気をつけて」とだけ告げ、電話を切っ

た。

それから間もなく。エレベーターに乗ったとき、突然内部が揺れはじめた。

「あ、さっき（友人が）言っていた地震かな。札幌は首都圏から離れているから、少し遅れて揺れが来たのだろうか」。そんなことをのんきに思いつつ、ただエレベーターが止まらないことを願っていた。幸いエレベーターは無事目標階まで到着する（今思えば、それはそれで問題だったようにも思うのだが）。

つまるところ「あの瞬間」を札幌で迎えた筆者にとって、東日本大震災の第一印象はそういう程度のものだったのである。

3. 11 [15:00~]

だが、なにか変だった。インターネットで地震情報を入力しようと思っても、何度トライしてもうまくアクセスできないのだ。そこでツイッター（twitter）を開くと、なんと「東北沖を震源とする巨大地震が発生」という「つぶやき」が続々と発せられていたのである。それから間もなく、巨大な津波が東日本沿岸部一帯を襲ったという情報が飛び込む。さらに、「仙台市内の海岸に200人を超える遺体」という情報（インターネット）に接した瞬間、違和感のはっきりとした恐怖が変わった。

筆者は被災地（岩手）出身である。岩手には家族も親戚も、そして多くの友人が住んでいる（青森・宮城・福島にも）。皆のことが気になった。しかし連絡を取ろうにも、電話は「ただいま通話できない状態…」と繰り返されるばかり。つながる気配すらない（メールも同様）。こうした状況は、夜になってもいっこうに改善する様子ではなかった。

今にして思えばそれも当然のことで、なぜなら首都圏も相当「酷い」状態だったためだ。地震によりJR私鉄を問わず、首都圏を走る全線が止まったため、いわゆる「帰宅困難者」が、数百万人規模で発生していたのである。

3. 12 [00:00~]

夜半頃から、少しずつだが首都圏の友人達とはメールで連絡がつくようになった。どうやら首都圏は、地震による直接的被害はあまり受けていなかった様子で、それだけでも少し安堵した。友人のなかには池袋一品川間を5時間かけて、あるいは立川まで6時間という時間を歩き通して自宅に帰りついた「強者」も居たが、しかしそういう人は数万人単位で「ざら」にいた。結局、その日は帰宅出来ず会社に泊まったり、臨時に都内各所に設けられた避難所で朝を迎えた人も多かったのである。

日付は変わっても、気は高ぶる一方で全く眠気がやって来ない。それなりに馴染みのあ

る海岸線が、街並みが、家が、車が、次々と黒い波濤によって破壊されていく光景を目の当たりにさせられたら、誰でもこうなるのではないか。テレビが繰り返し映し出す映像を、呆然と眺めるしかなかった。

そしてこのあたりから、枝野幸男内閣官房長官（当時）が頻繁にテレビに現れるようになる。のちに「#nero」（枝野寝ろ）というハッシュタグが生まれるほど、彼はこの時期幾度となく記者会見を行っていた（まさにこの頃、福島第一原子力発電所は危機的な状況を迎えていた。枝野氏は、この問題について「直ちに問題はない」といつもの淀みない口調で繰り返し語っていた。彼は真実を語ってくれてはいなかったことは、後になって判明する事実である。だが当時は、そういう「真相」など知る由もなかった）。

次第にテレビメディアも福島第一原発の問題に多くの時間を割くようになっていた。事故の状況、または原発の構造について語る専門家たちは、「飛行機に乗ると〇ミリシーベルト（だから問題ない）」と繰り返していた。

そうこうしているうち、15時36分、福島第一原発1号機で水素爆発が発生する。テレビでは「これは核爆発ではありません（だから大丈夫です）」と繰り返し語る専門家たちの姿があった（こうした専門家たちの多くは、後に「ミスター大丈夫」、「ミスター〇〇ミリシーベルト」といった「尊称」を奉られるようになる）。

とにかく「破局だけは避けて欲しい」と願いながら、福島市に住む友人の身が案じられた。しかし「福島第一原発から（福島市は）数十キロ離れているから、恐らく大丈夫」と根拠なくそう思う（願う）ことしか出来なかった。

結局、被災地の家族そして友人たちの誰とも連絡を着けられないまま、この日は終わった（皆の安否が確認できたのは、結局「震災発生」から3日後のことだった）。

3. 13 [21:00~]

13日の夜半、筆者は首都圏に戻った。羽田空港は果たして機能しているのか不安だったが、どうやら飛ぶとのこと。道内そして都内の友人達からも「まだ戻らないほうが良いのでは」と口々に言われたが、なぜかこのとき「自分は戻らなければいけない」と考えていた。別に自分が戻ったところで何の役に立てるわけでもないのに、今思えば不思議な心理状態であったと思う（要するに、冷静ではなかったのだろう）。しかし少なくとも、北海道という安全な地に、自分だけが居続けるという選択肢は有り得なかった。

帰京までの時間、札幌市内を回って、都内で枯渇し始めているらしい「電池」、「カイロ」などを購入する（札幌ではこの時点で「買占め」は起きていなかった）。このような「お土産」など、もちろん初めてのことである。

この日は山手線をはじめ、都内の各線はある程度運行していたため、なんとか羽田から自宅まで帰ることが出来た。山手線にはせいぜい1車両に数人、誰も乗っていない車両さえあった。日曜の夜。普段ならば若者客でえらく混みあう原宿、渋谷駅からも乗車する人は殆ど居なかった（正確には「少しはいた」。こんな状況でもなお遊べる神経は、逆にたいしたものだと思う）。こんな山手線の風景は、おそらく二度とお目にかかれないうらう。

しかし今思えば、翌日からはじまったあの悪名高き「計画停電」、そしてそれに伴う各線の運行自粛の「地獄」を考えると、実はこの日が帰京する最適なタイミングだった。この意味でも、筆者は確かに、少しばかり幸運だったのかもしれない。

3. 14〔早期〕－計画停電の発令－

ここで「計画停電」なるものについて簡単に説明しておく。

震災により東京電力（以下、東電）管内における電力供給力が急低下したため、「突発的な大停電を回避する」というお題目のもとに東電が行なった輪番停電のことである。具体的には東電管内の地域をいくつかのブロックに分け、早朝から夜半までブロックごとに強制的に2時間ないし4時間の停電を強制する、という仕組みであった。割り当てられたブロックは、例外なくブロック内では電力供給がストップするため、人命を預かる医療機関を中心に不安の声があがっていた。しかし計画停電なる「愚行」は、14日朝から強行される。

筆者の居住地域（埼玉県南部）も、ご多分に漏れず計画停電の影響を受けた。計画停電はブロック毎に1日1度、運が悪くと2度襲われる可能性があるため、計画停電の時間内は出来るだけ23区内にいるように心がけた。なぜなら23区内は、計画停電の対象外だったからだ。「首都機能を麻痺させるわけにはいかない」云々、いちいち尤もらしい理由が挙げられていたが、そんなの嘘である。数時間程度の予備電源あるいは自家発電機能を全く備えていない官庁など有る訳がない。仮にそんな設備もない官庁だったら、反って大問題ではないか（23区内が停電になったなら、日本の経済活動がストップしてしまうという理由も挙げられていたが、では23区外では経済活動が行なわれていないとでも？）。

いずれにせよ、なぜ23区内だけが計画停電の適用外とされたのか、その真相はいつか歴史があきらかにしてくれるだろう。

計画停電は、人々の日常の足である電車でまで影響を及ぼしていた。朝晩のラッシュ時を除く時間帯は、数時間単位で電車の運行が停止されたためである。有体にいえばその時間は「街に閉じ込められた」も同然であり、そのためこの計画停電の期間は、HPにア

ップされる計画停電情報を「随時」チェックしながら明日の予定を立てるのが日課となった。なぜ「随時」なのか。それは計画停電情報がいつ通達されるかはっきりしなかったうえに（たいてい深夜だった）、その計画自体ころころ変わったからだ。とにかく23区内という「解放区」にさえいけば、暖も取れるし食事も出来る。そのため、まず23区内に出ることが一日の第一目標となった。

こうした状態はだいたい一週間程度続いた。だいたい、というのは、なにせ頻繁に計画停電の予定は変更されたうえ、気がついたら計画停電自体がなくなっていたためだ。正直言って、実際いつまで計画停電が行なわれたか、正確には今だによくわからないのである。計画もなにもあったものではない（当時「無計画停電」とよく言われた）。その後は毎朝、ネットに告知される「でんき予報」の確認が新たな日課となる。

この頃、街はたいそう暗かった。雰囲気、ということもあるが、昼間の照明はもちろん、夜街ネオンや街灯も消えていたため、文字通り街が暗くなっていたのである（自動販売機やパチンコ屋の営業が批判の対象となったのも、この頃である）。

だが電力不足が生み出した最大の「喜劇」は、節電啓発担当大臣なる、日本憲政史上空前絶後の大臣が誕生したことであったろう。節電を啓発してまわる大臣など、たちの悪い冗談以外の何者でもない。またこの大臣はコンビニやスーパーを視察してまわっていたが、真っ先に連想したのは、戦時中に市中視察を頻繁に行なっていた東条英機だった。つまり何が言いたいのかというと「何の役にも立たない」ということだ。危機において指導者に人を得ないこの国は、本当に不幸である。

3. 14〔午後〕－店頭から商品が消えた－

震災の影響で一番身近だったもの、それは「買占め」だった。

帰京後、最寄のスーパーに立ち寄ってみたら、もの見事に商品が消えていた。どうやら首都圏では13日頃には、店頭から商品がほぼ完全に姿を消していたらしい。しかしカップラーメンや缶詰など、日持ちするものならまだわかるが、納豆や豆腐まで買い占めに走る心理はいったい何なのだろう。

とくに品薄感が顕著だったのは、水とトイレトペーパー、そして電池であった。各店「お一人様〇個まで」とされていたが、あっというまに売り切れ続出だったという。さらに首都圏全域の電力不足が懸念される中、懐中電灯が飛ぶように売れ、それと並行して電池もたちまち店頭から消える。関西まで電池を買いに行ったという声がテレビで紹介され、さらにアマゾン（amazon）では、単一電池一本「16000円！」という値が付けられていた。誰か実際に購入した人はいたのだろうか。

水については、多少気持ちはわからないでもない。やはり災害時に最も必要なのは水であるからだ。首都圏でも茨城県などの被災県では、地域によって一週間程度の断水。友人はその間毎日、自治体から水の供給を受けて生活していたらしい。しかし少なくとも首都圏では断水はなかったし、ミネラルウォーターの買占めに走る必要もないように思えたのだが（しかし間もなく、笑えない状況になる。3月12日、そして14日11時1分に福島第一原発3号機で起こった水素爆発などにより、3月22日に東京都金町浄水場から1kg当たり210ベクレルの放射性物質が検出され、都が「幼児への水道水の摂取を控えるよう」発表したためである）。

一方で、全く意味不明だったのがトイレトーパー買占めである。どうやら「石油ショック」の経験から、主婦層が買占めに走ったらしい。石油ショックと東日本大震災とは状況が全く異なるのに。おそらく主婦層には、危機になるとトイレトーパー買占めに走るようプログラムされているのだろう。

テレビでは「パニックを起こさないよう」、「落ち着いて行動するよう」、「買占めを控えるよう」有名人や芸能人たちが呼びかけるCMが繰り返し流れていたが、そんなCMをあざ笑うように、「売るほど（トイレトーパー）あるわよ」と、朗らかにインタビューで答えていた主婦たちの姿が忘れられない。

とはいえ、一連の買占め騒動はおおむね一ヵ月程度で収束したように感じる。主婦層にも、さすがにそれ以上買占めを続けるだけのエネルギー（お金）が残っていなかったのだろうか（あるいは単に「飽きた」のかもしれない）。

「東北人」として

東日本大震災の発生から、早いものでもう間もなく一年を過ぎようとしている。

しかし現在においても、被災地の復興はおろか復旧すらいつになるのか、全くわからないままである。宮城県沿岸部のある高校では、未だ大きなひびが入った校舎で授業が行なわれており、岩手県大槌町や宮古市の一部、山田町などの被災地域では信号さえ復旧していない（外灯の無い夜、信号の無い状態で車が行き交う光景を想像してみてください）。

しかし世の中、いつまでも暗いばかりではない。3月29日に行われた復興支援チャリティマッチ（サッカー）で、三浦知良選手が決めたゴールが、被災地に確かな力を与えたように、「東北人」である自分にも何かが出来ると思いたい。この先にあるのはずっと暗闇ではないと信じたい。